

崑劇「朱買臣休妻」の改編と上演について

舟部 淑子

はじめに

江蘇省崑劇院の崑劇「朱買臣休妻」は、江蘇省崑劇院の老生である姚繼焜と北京京劇院の阿甲が脚本の改編・整理を行い、一九八二年に初めて上演された。朱買臣の故事を基にした戯曲は、崑劇・京劇ともに人気演目として現在でも度々上演されているが、その内容は劇種・演目によって

かなり異なる。本稿では『蘭苑集萃』所収の崑劇「朱買臣休妻」⁽¹⁾が、何に基づいてどのように改編されたかを資料をもとに整理・分析する。また、演劇としては、脚本のみならず実際に上演されて初めて完成するものである。実際の上演の映像資料⁽²⁾をもとに舞台の演出や演技からも、その改編の意図を考察する。

1. 朱買臣故事と小説・戯曲への改編

題材となった朱買臣と崔氏の故事は、最も早いものとしては『漢書』卷六十四「朱買臣伝」に見える。その「朱買臣伝」の梗概は、以下のとおりである。

朱買臣は四十を過ぎてもうだつが上がらず、薪を売って生活を支えていた。妻の崔氏は貧しさに耐えられず、朱買臣に離縁を迫り、木匠に再嫁する。やがて会稽郡に太守として赴任してきた朱買臣は、崔氏とその夫が道路掃除をしているのを見て、宿舎に住まわせるなど生活の面倒をみる。一か月後、崔氏は自殺する。

その後の小説や戯曲等への改編については、井上泰山「朱買臣離縁譚演変考」⁽³⁾に詳細な分析がある。それによる

と、明代には短編小説に改編されて『国色天香』・『燕居筆記』・『万錦情林』等に収められている(p.142)。戯曲については、元代に雜劇「漁樵記」(『元曲選』)として改編されているが、明代の徐渭著『南詞叙録』に「朱買臣休妻記」の外題が著録されていることから、かなり早くから南戲の演題として採用されていたとしている(p.148)。

短編小説「買臣記」は『漢書』「朱買臣伝」の内容をほぼ踏襲しているが、新しく付け加えられた、あるいは改編した点を、妻である崔氏が、口論に際して「感情を顕わにして哀訴懇願するのではなく、みずからの感情を抑えて、あくまで冷静に分別をもって勧告する」理屈っぽいことばを用いること、再会後復縁を懇願する際にも成語を多用するなど、「庶民ではなく教養ある士人の妻の如き口吻を帯びている」とする(pp.143-144)。また、『漢書』「朱買臣伝」にあった、再嫁した崔氏が新しい夫と墓参に詣でた際、相変わらず困窮している朱買臣に食物を与えたという「妻の慈悲心」を示すプロットと、さらに、朱買臣も太守となって崔氏と再会したときに一か月の間宿舎に住まわせたというくだりが削られて、逆に怨嗟のことばを崔氏に浴びせるといふ「狭量な高官像へと変貌している」としている(pp.145-146)。

『元曲選』本の元雜劇「漁樵記」への改編には「正史や小説には見られない幾つかの新たな趣向が加えられることになった」(p.151)としている。それには、新たな登場人物の出現や妻(玉天仙)の性格と役割の変化等があげられるが、「とりわけ重要な意味をもつと思われるのは、第四折にみられる復縁の趣向である」(p.152)とする。朱買臣が官位を得て故郷に戻り別れた妻に再会、復縁を望む妻との激しい口論で破局寸前にまで至るが、そこで科挙受験の費用が全て妻の父親から提供されたものであったことを知り、朱買臣は復縁を承諾せざるを得なくなるというものである。そして、この「復縁の意味」を以下のように述べている(pp.160-161)。

……士大夫階級の側に伝統的に培われてきた独尊意識の崩壊という観点からすれば、実は見逃すことのできない重大な意味をもっていると考えられる。(中略)
朱買臣は劇中一貫して既成道德の擁護者としての態度を保持しようと努める。天命に従って貧困に甘んじ、刻苦して勉学に励み、科挙という既成の価値観にしがみついて出世しようとする。ところが妻の方はそれに真っ向から対立する構えを見せる。読書よりも眼前の

生活を重んじ、実現する見込みのない夢を追い求める夫を嘲笑し、再婚することによって物質的な欲求を満たそうとする。(中略) 朱買臣は表面的には勝利したように見えるものの、実際には妻とそれに付随する財力に屈服した形で結末を迎えるのである。(中略) ……夫婦喧嘩という一定の枠組みの中で夫を痛罵させることによって、実は、もはや現実にそぐわなくなつた陳腐な道徳律を排撃しているのであり、いわば、価値の相対化を通して既成道徳の存在意義を問い直しているのである。

清代の朱買臣故事を戯曲化した脚本としては、『綴白裘』所収の「漁樵記」と「爛柯山」が挙げられる。「漁樵記」には「北樵」「逼休」「寄信」「相罵」が、「爛柯山」には「痴夢」「撥水」の折子戯がとられている。『綴白裘・新集』には、「爛柯山」として「北樵」「逼休」「寄信」「相罵」「逼休」「悔嫁」「痴夢」「撥水」が収められている。周秦『崑劇集存・乙編』によると、同じ題材であるために、崑劇団がしばしば「漁樵記」と「爛柯山」の折子戯を混合して上演するが、実際には「漁樵記」の「北樵」「寄信」「相罵」は雜劇であると述べている(p.3880)。

2. 「朱買臣休妻」の底本と改編の経緯

現在上演されている崑劇「朱買臣休妻」の脚本は、主要なものとして二種確認できる。江蘇省崑劇院の「朱買臣休妻」と、上海崑劇団の「朱買臣休妻」である。⁽⁴⁾ 両者は共に「爛柯山」の折子戯として『增輯六也曲譜』所収の「前逼」・「悔嫁」・「痴夢」・「撥水」、『六也曲譜初集』所収の「後逼」を底本として改編していると考えられるが、その内容はかなり異なる。

上海崑劇団の脚本では、登場人物・プロット等はほぼ底本を踏襲して、「前逼」「後逼」「悔嫁」「痴夢」「撥水」の五齣で構成されている。江蘇省崑劇院の「朱買臣休妻」では「後逼」を削って、「前逼」「悔嫁」「痴夢」「撥水」の四齣で全本としている。本稿では、人物像・プロットともにより新しい試みがなされていると考えられる江蘇省崑劇院の「朱買臣休妻」の改編を対象とする。

姚繼焜は、『增輯六也曲譜』及び『六也曲譜初集』を底本として、一九八〇年に「逼休」・「悔嫁」・「痴夢」・「撥水」の四齣からなる「朱買臣休妻」全本の整理・改編を完了している。この一九八〇年時点での脚本が、郑培凱主編『春心无处不飞燕——张继青艺术传承记录』⁽⁶⁾に《朱买臣

休妻》姚继焜改本」として収められている(p.271-297)。その後、一九八一年には劉衛国を監督として正式に舞台稽古を開始する。そして、伝統演劇上演の常であるが、舞台稽古のなかで、あるいは実際の上演の経験をもとに、試行錯誤を繰り返しながらこの脚本を改訂している。さらに、中国京劇院の阿甲が加入して整理と改訂を行って完成した脚本が、『蘭苑集萃』に「朱買臣休妻」として収められているのである。一九八二年初演の崑劇「朱買臣休妻」は、この脚本で上演されたものである。

3. 江蘇省崑劇院「朱買臣休妻」の脚本改編と上演

次に、『蘭苑集萃』所収の「朱買臣休妻」が底本である『增輯六也曲譜』及び『六也曲譜初集』の折子戲から改編をした主な点を、各齣の内容を踏まえながら整理していきたい。煩雑を避けるため、『蘭苑集萃』所収の「朱買臣休妻」を蘭苑集萃本、『增輯六也曲譜』及び『六也曲譜初集』の折子戲を六也曲譜本、『春心无处不飞悬——张继青艺术传承记录』所収の《朱买臣休妻》姚继焜改本》を姚继焜改本とする。

また、併せて上演の映像資料も参考にしながら改編の意味を考えたい。崑劇「朱買臣休妻」を演じた姚继焜と張继

青は、『昆曲内旦、正旦的表演艺术(上・下)』で、朱買臣と崔氏を演じるにあたっての認識と経験を語っている。⁽⁷⁾姚继焜は、まずこの演目が当時の江蘇省崑劇院の看板演目であり、どの興行地に行っても必ず演じていたと述べている⁽⁸⁾(p.84)。

(1) 「逼休」登場人物・張西喬・朱買臣・崔氏

【概要】大工から棺材店に商売替えした張西喬がまず登場し、朱買臣との貧しい生活に嫌気がさしていた崔氏を後妻として狙っていることを述べる。朱買臣は雪が降るのを恐れ、薪取りをあきらめて帰宅する。崔氏は手ぶらで戻った朱買臣に腹を立て、貧しい生活への不満を並べたてて離縁状を書くよう迫る。朱買臣は、人相見の占いで近い将来科挙に合格し出世を果たすことになっていると崔氏をなだめるが、崔氏は自ら準備した離縁状を朱買臣につきつける。衝撃で氣を失った朱買臣が意識を取り戻すと、崔氏はすでに去った後であった。

六也曲譜本の「前逼」を基に「後逼」の要素を入れて改編したのがこの「逼休」である。「後逼」での、大工の張西喬と結託して崔氏を離縁させようとする唐道姑と崔氏の

やりとりが削られ、姚継焜本・蘭苑集萃本では、唐道姑は話としては出るものの、舞台上には登場せず、張西喬と崔氏との仲を取り持つのは王媽媽である。また、「後遍」では崔氏が朱買臣に離縁状を書くよう迫るが、蘭苑集萃本では崔氏が自ら離縁状を書いて準備しているように改編されている。

姚継焜は、この「遍休」は、台詞がかなり増やされているが、主として朱買臣を演じる老生のために書かれたものであるとしている。また、阿甲が朱買臣のせりふの「窮儒窮到底、到底不伶俐」を「窮儒窮到底、独求书中去」に変更したが、意図としては「極貧にありながら奮起して向上しようとする知識人の故事」とするためであろうとしている（同p.16）。何よりも書物と学問を重視する朱買臣像が強調され、安定した生活を求めるごく一般の生活人である崔氏との落差がより強調されている。しかし、時にはユーモラスに崔氏をなだめる朱買臣であり、単なる出世を求める文人ではなく、妻の気持ちも理解する温情のある人物として描かれている。

食事にも事欠く貧しい生活を二十年も耐えた崔氏がその憤懣をぶちまけ、朱買臣と口論になるが、当時の女性の身分として崔氏自身に生計を立てるすべはなく、他人に頼る

しかない状況が、よりその不平と憤懣をやりきれないものにしていてと考えられる。そのやりとりの中でも、生活よりも書物を大切にして鷹揚に構える朱買臣のことばが、さらに崔氏の怒りに油を注ぐ結果になっている。すでにひそかに離縁状を準備している崔氏に対し、朱買臣はそのうち仕官できるとなだめるくんだりでは、崑曲でよく用いられる「介白」の手法が用いられている(p.16)。

崔氏：(唱)【销金帐】也是前缘宿世，嫁着穷酸鬼。

朱买臣：娘子不要性急，出头的日子就来了。

崔氏：(唱)叹终朝受寒饥，思量甚时出头。

朱买臣：发迹的日子末也就来了。

崔氏：(唱)啊呀甚年发迹，啊呀天吓！

朱买臣：娘子，姜太公八十遇文王，我才四十九岁，又

非蓬蒿之人，自有一日要做官的。

崔氏：(唱)早不如决裂，决裂你东我西。朱买臣，你若

做高官，我也无反悔。

啊呀天吓！叫我怎生……怎生穷熬得到底。

飢えと寒さに苦しむ生活からいつ抜け出せるのかと嘆く崔氏と、八十歳で文王に認められた姜太公の例を出して、

まだ四九歳の自分は余裕があり、出世の日は近いとなだめる朱買臣のやりとりである。脚本では交互にあげられているが、実際の舞台では崔氏の唱に朱買臣がかぶせるように同時にせりふをいう、非常にテンポのよい緊張感のある演出になっている。「痴夢」の折でも、夢の中で朱買臣の夫人として崔氏に迎えが来るくだりで用いられている。

また、朱買臣が近い将来科挙に合格するという人相見の占いをもち出し、崔氏にもう少しの辛抱だなだめようとする。そして、高官の夫人になった想定で「鳳冠」をかぶせるくだりでは、六也曲譜本では何も小道具を使わずに「鳳冠」をかぶせる所作をするだけであったが、姚継焜改本と蘭苑集萃本の「朱買臣休妻」では崔氏の機嫌を取りながら、米を洗うざるを赤い布で覆い、それを崔氏に実際にかぶせている。「一品夫人」と呼ばれてつい気分をよくしていた崔氏はざるを見てかっとなり、ざるを投げ捨てて用意してあった離縁状を朱買臣につきつける。こうした演技によって、夫婦の感情の動きと食い違いがより自然な流れのなかで表現されているといえる。貧しさを責める崔氏をあれこれとなだめ、離縁状を書くことを拒否していた朱買臣も、崔氏がすでに離縁状を準備していたことに衝撃を受けて絶望し、結局は拇印を押す。

この「逗休」の最後では、崔氏が気絶した朱買臣に書物の上に紋銀一錠を置き、「養不活家、何必要我?……未犯三从和四徳、只因难熬饥和寒」「養えないなら、なぜ私を娶ったのか。……三従四徳を犯しているわけではなく、ただ飢えと寒さに耐えられないからだ。」(p.169)ということばを残して去る。脚本では、朱買臣が意識を取り戻して崔氏が去ったのを知り、「本当に行ってしまったのか」という台詞で終わっている。これに対し舞台では、ひとしきり崔氏を探して結局諦めたところで崔氏の残した紋銀一錠に気づくが、それを投げ捨てて書物を手に決然と部屋に向かうという、科挙合格への決意を固めたことを表す演技で終わっている。それまでのやりとりでは、食い違いはあるものの、お互いへの理解や思いやりが全くないわけではなく、求めるものの違いから溝ができていると考えられるが、離縁状を契機に取り返しのつかない結末に至っているといえる。

六也曲譜本「後逗」では唐道姑が崔氏をいいくるめて張西喬に再嫁させようとするが、そのくだりを削除し、崔氏と朱買臣の思いと感情の動きをより細やかに表現したことで、二人がそれぞれリアリティのある人物として演じられているといえる。

(2)「悔嫁」 登場人物・張西喬・崔氏

【概要】衣食足りた生活を求めて張西喬に嫁いだ崔氏であったが、半年すぎた頃には、張西喬は崔氏のあら捜しをして罵り、何かといえば殴る蹴るの毎日であった。貧しくとも自分を大切にしてくれた朱買臣を思い出し、すでに再嫁を後悔していた。張西喬も崔氏が仲人の話ほど若くなく、妻としても役に立たないという不満で、互いに口汚く罵りあう。張西喬は、結納の銀二百両を返せば崔氏を自由にさせてやるとうそぶく。崔氏は帰る家もなく、しかたなく仲人の王媽媽の家に身を寄せることにする。

この「悔嫁」は基本的に「逼休」と「痴夢」とをつなぐ短い齣であり、底本の六也曲譜本「悔嫁」中の数曲を省略している。また、六也曲譜本では、崔氏が初夜に張西喬が菓ぶきの家に住む足に障碍のある大して財産のある男ではないことを知り、唐道姑に騙されたと気づいて王媽媽の元に逃げ出す。これが、姚繼焜改本と蘭苑集萃本では、半年ほど夫婦として暮らしているという設定に変更されている。底本での崔氏が初夜の前に逃げ出すという設定の方が、伝統的倫理観にかなうという意図が伺える。

(3)「痴夢」 登場人物・報録甲・報録乙・崔氏・院子・衙婆・衆・張西喬

【概要】会稽太守に任じられた朱買臣にその報せを告げる役人がやってくるが、家の場所を偶然会った崔氏に尋ねる。朱買臣が任官されたことを知った崔氏は、衝撃を受けて自らの不運を嘆き、後悔にさいなまれる。ふと、うたた寝をした崔氏は夢をみる。朱買臣の妻として自分が迎えられ、太守夫人の鳳冠と霞帔を身につけて歓喜の絶頂にいる。すると、張西喬が現れて崔氏と口論になる。そこで崔氏は夢から醒める。

「痴夢」は「朱買臣休妻」の中心といえる齣であるが、登場人物は多いものの重要な関わりは少なく、いわば正旦の一人芝居で、ほとんどが崔氏の夢の中で起きる劇中劇である。また、完成度の高さから、上演に際してもあまり変えることがなく、六也曲譜本・姚繼焜改本・蘭苑集萃本ともに大きな差異がない。違いとしては、六也曲譜本と比較して改編後は、台詞が口語的になっていて点が挙げられる。上演に関しては様々な工夫がみとれる。沈达人《張継青的昆劇表演艺术征程》(戏剧丛刊二〇一二年 p.3)では

以下のように述べている。

以《痴夢》來說，崔氏在夢中扣上鳳冠，穿上霞帔，走起官步的時候，又猶如孩童般的撮起嘴唇，念念有詞，這種忘情而忘形的細節描繪，就是張繼青的加工。

崔氏が鳳冠と霞帔を身に着け、子供のように口を突き出して気取って歩くという、我を忘れて有頂天になるさまを表す演技は張繼青の演出であるという。こうした演技によって、崔氏の無邪気さが表現され、夢から醒めた後の失望との落差がより鮮明になる。

また、崔氏を演じた張繼青は、『春心无处不飞悬——張繼青艺术传承记录』の中で、『朱買臣休妻』の崔氏の演技は、その他の演目の正旦とは異なる」と述べている。(p.86)。

这个崔氏是正旦，不过这个正旦不同于其他戏的正旦，像《琵琶记》的赵五娘子，这在昆曲里面是大正旦。而《朱买臣休妻》里面的崔氏则是女的大花脸，这个人物个性很强，她的表演非常夸张。当然，崔氏也有一般女性那种共性的东西，所以在昆曲行当里面还是属于正旦。

『琵琶記』の趙五娘は科挙受験のため洛陽に行つて戻らない夫の留守を預かり、飢饉のなかで自らは糠を食べて舅と姑に仕えたという典型的な貞女である。本来をういった女性を演じるのが正旦であるが、それに対し「朱買臣休妻」の崔氏は、いわば「花臉」の女版である「女大花臉」ともいえる個性の強い女性であるため、非常に誇張した演技をする。しかし、崔氏もまた普通の女性としての性格をもっているために正旦が演じるとしている。また、崔氏という役柄の特徴を以下のように述べている。(p.86)。

这个戏我非常喜欢，因为戏里有很多表演的东西，很丰富。比如崔氏会放声大笑，一般旦角在舞台上演出是笑不露齿，但她却是很夸张的，可以呵呵大笑，个性很强，表演非常有特色，(以下略)

一般に崑劇では旦役は齒が見えないように笑うが、崔氏は大声で笑う個性の強い女性として演じられ、豊かな表現が可能であるとしている。

また、崑劇の俳優でもある中国戯曲学院の顧衛英は、二〇〇六年十二月に厦門で「痴夢」を演じているが、その時

に張継青の演技指導を直接受けている。そして、特に力を入れて「四笑一哭」の演技をするよう指導されている。その「四笑一哭」を顧衛英は《傳承〈痴夢〉感悟崔氏》（中国戏剧二〇一七年 pp.46-47）の中で以下のように説明している。

- ①夢に入る前、朱買臣が太守に任ぜられた報せを聞いたときの後悔と苦悩を伴った笑い。
- ②あれこれ考えすぎて心が乱れ、夢と現実の境で、激しく戸を叩く音の異様に笑う。
- ③夢の中ではつきりと自分が「夫人」と呼ばれ、小躍りして笑うが、朱買臣の姿が見えず不安になり、笑いが止まる。
- ④夢の中で朱買臣からの迎えが到着、鳳冠と霞帔を身に着け、歓喜の中で有頂天になり思わず大声で笑う。
- ⑤喜びの絶頂で、斧を持って追いかけてきた張西喬が登場。夢から醒め、相変わらずの粗末な部屋を見て嘆く。

様々な段階における崔氏の複雑な心の動きを、ことばだけでなく「四笑一哭」という演技で細やかに演じ分けている。それによって次第に崔氏の絶望が深まっていく様子により鮮明に表現されているといえる。また、伝統的女性像

としては問題の多い個性の強い女性が、そのありのままの姿で存在感をもって魅力的に表現されているといえる。

〔4〕「撥水」 登場人物…地方・朱買臣・崔氏・衆

【概要】爛柯山の地方（里甲長）が登場、会稽太守となった朱買臣を盛大に祝って迎えることを述べる。朱買臣に会いに来た崔氏は地方に追い払われるが、朱買臣を呼んで騒ぎ、騒ぎを聞いて出てきた朱買臣は崔氏の異様な姿に驚く。妻として受け入れるよう求めて引き下がらない崔氏に、朱買臣は盆に入れた水を地面に撒き、それを元通りに戻すことができれば受け入れるという。「覆水、収め難し」と知った崔氏は入水して自ら命を絶ち、朱買臣は崔氏の墓をたてるよう指示し、しばらくその水辺に佇む。

蘭苑集萃本では、六也曲譜本での唐道姑と張西喬が崔氏の様子を見てけなしたりからかったりするくだりが削られて、崔氏と朱買臣のやりとりが主になっている。赤い大きな花を頭に飾り、一目で尋常ではないとわかるいでたちで、門番や小役人に追い払われても執拗に面会を求めて騒ぎたて、朱買臣に復縁を迫る。朱買臣は離縁状を突きつけられた時のことを述べて、崔氏を諦めさせようとするが、それ

でもすがる崔氏に、心を痛めながらも決断を下す。

朱买臣：【川拔棹】崔氏女哭啼啼。俺朱买臣，心惶凄，

想当初破屋堂前，屈膝于伊。如今在十字街
头，伊跪马前，这叫我怎生置理？老天哪！看
来是，裂缝之竹难合弥。

以上のように、過去の夫婦としての情もうかがえるが、結局は「覆水、盆に収め難し」となり、崔氏の復縁の願いはかなわない。一人残された崔氏は、目の前の川の水を見て、引き寄せられるように入水する。張継青の演技には、夢から醒めて心を残しつつも静かに自分の「安身之地」として川に身を投げる崔氏の自然な心の動きが表現されている。崔氏入水の知らせを聞いた朱買臣は、爛柯山のふもとに埋葬して「朱買臣故妻崔氏之墓」と記した石碑を立てるよう命じ、しばらく佇んで一札する。

六也曲譜本では、崔氏が「覆水、盆に収め難し」のくだりで【清江引】「我倒不如喪黃泉，免被人笑耻。」（人に嘲られるよりは、むしろ死んだ方がましだ）と歌って、恥に耐えられずに死を選ぶのである。朱買臣も、最後は崔氏の墓は立てるものの、夫婦のあるべき姿を説いて、感情をそ

れほど乱すこともない。

4. おわりに

以上、「朱買臣休妻」の脚本と上演について、整理・考察してきた。この脚本はいわば演出のためのもので、上演されて初めて完成されるといえる。「朱買臣休妻」では、実際の映像資料ではより口語的な台詞に変更されていたり、省略された部分もかなりある。それまで上演していた演目を改編する際には、当然、その改編のねらいがあるはずである。それは単に脚本を読むだけでなく、実際の舞台の演出とあわせて考えることで見えてくるのではないだろうか。たとえば、最後の「撥水」での「覆水、収め難し」のくだりは、朱買臣故事においては、崔氏が「恥に耐えられずに入水した」というのが一般的評価である。しかし、この「朱買臣休妻」での崔氏は、そうした伝統的女性観に収まりきれない人物として表現されているように思える。決して推奨されるべき行動をとっているわけでもなく、優れた人格をもっているわけでもないが、自己の欲望に忠実で思いのままに行動する、いわば近代的女人物像として表現されている。小人物ではあるが、伝統的概念に縛られない自由な女性として演じられているのではないだろうか。

「四笑一哭」の演技においても、落差の大きい崔氏的心灵・心の動きが具体的に表現され、符号としての「崔氏」ではなく、ひとりの生きた人間としての説得力を持った人物像になっているといえる。舞台の演出や演技を通してしかわからない表現や、それによってより豊かに表現できることもある。朱買臣もまた、崔氏を理解していないわけではなく、短編小説「買臣記」のような「狭量な高官像」でもない。元雜劇「漁樵記」のように復縁するのでもなく、互いを思いやる心遣いもありながら破局に向かう過程が、こまやかに説得力をもって演じられている。それによって、現代的ともいえる破局の悲劇性がより鮮明になっていると考えられる。

〔参考文献一覽〕

- (1) 文化部振興崑劇指導委員會 中国崑劇研究会編『蘭苑集萃——五十年中国崑劇演出劇本選』文化芸術出版社 二〇〇〇年
- (2) YouTube 崑劇「朱買臣休妻」一九九八年十一月台北市上演 国立伝統芸術中心籌備処 発行
<https://www.youtube.com/watch?v=bogdqyNmJIs>
https://www.youtube.com/watch?v=v93U_LA5L-0

- (3) 井上泰山「朱買臣離縁譚演變考」関西大学出版部『中国近世戯曲小説論集』所収平成一六年
- (4) 「漁樵記」錢德蒼編選 汪協如点校『綴白裘』中華書局 二〇〇五年
- (5) 「爛柯山」錢德蒼編選 汪協如点校『綴白裘』中華書局 二〇〇五年
- (6) 柯森燿訳「朱買臣休妻」『悲劇喜劇』三七(一一)(四〇九) 早川書房一九八四年
- (7) 影印版「爛柯山」(周秦主編『崑劇集存・甲編』所収『增輯六也曲譜』『六也曲譜初集』) 黄山書社 二〇一一年
- (8) 排印版「爛柯山」(周秦主編『崑劇集存・乙編』所収『增輯六也曲譜』『六也曲譜初集』) 黄山書社 二〇一一年
- (9) 郑培凱主編 张继青口述 陈春苗 张慧 纪录整理《春心无处不飞悬——张继青艺术传承记录》北京大学出版社 二〇一三年
- (10) 姚继焜 张继青 讲授《昆曲闺门旦、正旦的表演艺术(上・下)》《文史知识》二〇一四年 第一〇期 pp.108-112 第一一期 pp.84-90) 中华书局
- (11) 沈达人《张继青的昆剧表演艺术征程》戏剧丛刊 二〇一

二年

(12) 顾卫英《传承〈痴梦〉感悟崔氏》中国戏剧二〇一七年

注

- (1) 文化部振興崑劇指導委員會 中国崑劇研究会編『蘭苑集萃——五十年中国崑劇演出劇本選』文化艺术出版社 二〇〇〇年 pp.159-185
- (2) 一九九八年に台北市で上演された江蘇省崑劇院による崑劇「朱買臣休妻」の映像資料(国立伝統芸術中心籌備処発行)に よる。
<https://www.youtube.com/watch?v=boqdyNmJIs>
https://www.youtube.com/watch?v=v93U_LA5L-0
- (3) 井上泰山著「朱買臣離縁譚演變考」関西大学出版部『中国近世戯曲小説論集』所収平成一六年 pp.136-165
- (4) 上海崑劇団「朱買臣休妻」の原文脚本は未見であるが、柯森耀訳「朱買臣休妻」(『悲劇喜劇』三七(一)(四〇九) 早川書房 一九八四年 pp.99-118, 127-129) を参考にした。編集部に補足に「上海崑劇団陸兼之一九八一年三月上演改修台本による」とある(p.129)
- (5) 周秦主編『崑劇集存・甲編』(黄山書社 二〇一一年)に『增輯六也曲譜』所収の「前逼」・「梅嫁」・「痴夢」・「撥水」・「六也曲譜初集』所収の「後逼」の影印版が載せられている(pp.4601-4652)。また、周秦主編『崑劇集存・乙編』(黄山書

社 二〇一一年)に、各折子の朱建華・金仁標校註の排印版が載せられている(pp.3877-3921)。

- (6) 郑培凱 主編 张继青口述 陈春苗 张慧 纪录整理《春心无处不飞悬——张继青艺术传承记录》(北京大学出版社 二〇一三年 pp.099-152)
- (7) その他の配役は、張西喬：姚繼蓀、院公：黃小午、衛婆：王維艱、地方：林繼凡が担当している。
- (8) 原文：这个戏是当年的“打炮戏”，每当一个码头这个戏是必须要演的。
- (9) 《昆曲围内旦、正目的表演艺术(上・下)》(《文史知识》二〇一四年 第一〇期 pp.108-112 第二一期 pp.84-90) 中华书局
- (10) 「花臉」は、一般に男性で臉譜をほとんど荒々しい性格の人物を演じる役柄をこう。

(文教大学)